

ツーリズムの『隠れた次元』

—「夜のツーリズム」と運転代行業に関する予備的考察—

A Hidden Dimension in Tourism: Nightlife and replacement driver service in Japan

鈴木 晃志郎*

SUZUKI Koshiro

深夜交通の発達した大都市圏において、夜遊び (Nightlife) における移動の障壁は自覚されにくい。しかし、夕刻を過ぎると公共交通が早々に運行を終了してしまう地方都市では、夜遊び時間帯の移動手段の確保は切実な問題となる。逆にいえば、都市の特性をツーリズムの観点から考察するうえで、時間軸の視点をもつことは大きな意義と可能性を秘めていると考えられる。しかし、若干の例外 (夜景や夜間ライトアップ) を除き、「夜のツーリズム」が観光学の議論において注目されることはほとんどなかったといえる。本研究では、海外の文献を紐解いて、日本における『夜のツーリズム』研究の今後の可能性をさぐりながら、自身は夜のツーリズム産業を特徴づけるものとして「運転代行業」に注目し、2012年に財団法人によって行われた事業者アンケート調査の一部を使って、代行業の地域的差異に関する予備的な考察を試みる。

キーワード：夜のツーリズム、時間地理学、運転代行業、治安、夜遊び

1. 夜のツーリズム研究

(1) はじめに

周知の如く (特に日本の) 観光学はツーリズム産業と強く結びついて成長を遂げてきた学問領域である。このため、多くの人々が寝静まる夜間に生起する観光現象はマーケットも限られ、ともすれば観光学において『隠れた次元』となりがちであった。これが、夜間特有の観光産業や観光現象に対する関心の低さにも結びついている。本稿はこうした問題関心のもと、既往の観光研究に時間地理学的な視点をとり入れ、これまで体系だった研究領域とはなっていない「夜のツーリズム」を独自の研究領域と認識することの意義を、文献レビューを通じて検討する。同時に、自らは、人文科学において過去に学術的な関心を向けられたことのない「運転代行業」に注目し、予察的な考察を行うことにより、夜のツーリズム研究の可能性を検討する。

(2) 欧米の「夜のツーリズム」研究

夜のツーリズムを体系的に論じようとする試みは、今のところほとんど存在しない。しかし欧米では、1990年代以降、夜間の観光行動について、そのマイナスの側面に注目した研究の蓄積が進んできた。それらは大きく分けると、(1)夜間の観光行動を特徴づけるさまざまな「夜遊び (nightlife)」行動とさまざまな違法行為やトラブルとの関係に注目し、社会病理学や保健衛生、安全学的な視点か

ら夜間のツーリズムを捉えるもの、(2)性産業やナイトクラブ、夜間市場など、夜間の観光産業に関するものにと大別される。

デトロイトで誕生した、リズムマシーンとシンセサイザーをシーケンサーでループする電子音楽 (デトロイト・テクノ) が1988年、英ヴァージン・レコーズ社によって欧州に紹介され、ほぼ同時期にアシッド・ハウスと呼ばれるダンス音楽が台頭したのを契機に、ヨーロッパ全域のクラブやレイヴ (一回限りのダンスイベント) でテクノやハウス音楽が掛けられるようになった。こうした音楽イベントは (アメリカのヒッピー・ムーヴメントを指す「サマー・オブ・ラヴ」をもじって) 英国でセカンド・サマー・オブ・ラヴと形容されたように、ドラッグ使用と強い親和性をもっていた。このため、クラブやレイヴイベントを介した青少年の薬物、性疾患、暴力の拡がりや1990年代以降に社会問題化し、研究者による実態解明が進んだ (Bellis *et al.* 2002; Berkeley 1998; Kurtz *et al.* 2009; Freese *et al.* 2002; Measham *et al.* 2001)。これらクラブ・カルチャーは (例えばピサ島やロンドンのクラブへの) いわゆる聖地巡礼の側面ももっていたため、観光学の関連領域でも研究の蓄積が進められた (Lee *et al.* 2008; Sönmez *et al.* 2013)。

これら研究の蓄積をもとに、欧州防疫研究所の Amador Calafat らの研究チームは2010年に『ツーリズム、夜遊び

*富山大学 人文学部・准教授

と暴力』を出版 (Calafat *et al.* 2010)。同書は「夜遊びレクリエーションのもつ社会・経済・文化的重要性」、「夜のレクリエーションがもつ問題」、「アルコールと違法ドラッグ」、「暴力」、「性」、「インターネットとリスク」、「より安全なツーリズムのための提言」から構成されている。同書の出版により「夜のツーリズム」は、特に観光行動をもたらすネガティブな効果の解明という側面において、独立したひとつの研究領域になったものと考えて良いであろう。彼らはその後も、英国とドイツの若年旅行者を対象に、旅先で夜遊び中に口論や喧嘩に巻き込まれやすい人物像をロジスティック回帰分析によって明らかにするなど、研究例の蓄積を進めている (Calafat *et al.* 2013)。また Tutenges (2012) は、ブルガリアの夜遊び観光リゾート地に滞在しているデンマーク人の青年観光客の間で広がる疾病保有率を、彼らがスリルを求めて行う薬物使用、行きずりの性交渉や売買春経験との関係から検討し、これを「夜遊びのツーリズム」と称している。いわゆるフェミニスト研究の視座から、主に途上国の女性がおかれた性的搾取の実態を告発した研究の中にも、夜のツーリズムに当てはまるものが見受けられる (Davidson 1996; Bishop and Robinson 1999; Del Casino Jr. and Hanna 1999; Hobbs *et al.* 2011; Goldenberg *et al.* 2011; Hesse and Tutenges 2011)。

これらの研究例は、いずれも観光客が被害・加害者の別なく与することになる様々な脱法行為や非行、それに伴って二次的に行われる社会的弱者からの性的搾取が研究の関心であり、それらを通じて定式化されつつある「夜のツーリズム」も、観光行動に関連した治安や非行、社会病理といったネガティブな側面と分かちがたく結びついている。

(3) 日本およびアジア圏の夜間観光に関する研究

一方日本では、明治期からライトアップによる観光まちづくりを進めていた長谷寺 (奈良県) のように、夜景が古くから観光アトラクションのひとつとなってきた (小川 2009)。現在でも、ライトアップによる夜間景観の創造を観光振興に結びつける事例報告には事欠かず (石原 1987; 谷原 2008)、「夜景観光学」や「夜景遺産」(丸々 2012) のように、一般向けにその魅力をアピールする書籍も氾濫している。

学術的な研究としては、いわゆる景観論的な研究の中で、盛り場に与えられた主観的意味に注目した報告がいくつかなされている。夜の富山駅前集まる若者たちの抱く場所愛を分析し、彼らが「たんなる街路」へ夜遊びや安らぎの場としての意味を附与し、「主観的社会空間」をより強固にしていると指摘する杉山 (1999) などはその代表的な研究例といえよう。また、夜の屋台や市場が主要な

観光資源として認知されている台湾では、外国人観光客の夜間購買行動や夜遊びと関わって形成される都市イメージの解明を試みた研究例が近年いくつか報告されるようになっている (Chang and Hsieh 2006; Hsieh and Chang 2006; Lee *et al.* 2008)。

今のところ日本を含むアジア圏では、欧米のように関連領域の研究を「夜(遊び)のツーリズム」として概念化する動きはない。しかし上記の通り、実際には夜間の外出行動に関して、欧米型の「夜のツーリズム」研究とは異なった様相で事例の蓄積は進みつつあると考えられる。これは、夜間の外出がそれだけ忌諱されず、安全であることの間接的な表れでもあろう。この『隠れた次元』に光を当て、観光研究の対象としての認識を深めることは、日本の観光学の独自性や可能性をさぐるうえで意味があると思われる。

2. 夜のツーリズムと運輸代行業

人の空間的行動についての研究は、大きく分けて選択型アプローチと制約型アプローチの2つの研究アプローチに立脚して行われる (岡本 2003)。前者は、人のイメージ形成や意思決定過程を重視する立場であり、後者は人の意思決定に及ぼすさまざまな制約に注目する立場である。観光行動も広義には空間的行動のひとつであり、この2つのアプローチで捉えることが可能である。例えば場所イメージの帰結として観光行動を捉えるアプローチは、広義には選択型アプローチに基づいているといえる。

しかし、人が夜間に観光行動をおこす際には、公共交通の運行停止によるアクセシビリティ悪化や可視性の低下、治安の相対的悪化など、多くの制約が影響しうる。ゆえに、特に夜間の観光行動は、様々な制約条件との Negotiation の問題として考慮すべき面も多い。このように観光行動を時間軸で捉え、制約型アプローチで検討する際は、時間地理学の枠組みが有効である。時間地理学では、人に影響を及ぼす制約を大きく3つに類型化している。(1) 能力の制約 (睡眠時間の消費、交通手段などの技術的限界によって生じる到達可能範囲の制約)、(2) 結合の制約 (特定の時刻・場所で一定時間、他と接触していなければならないことによって生じる制約)、(3) 権威の制約 (法や権威、規則によってなされる立入制限が個人の到達可能性に限界をもたらす場合) である (Thrift 1977)。

夜のツーリズムを制約の観点から考えるとき、最も地域間格差が如実に表れるのは、公共交通網の充実度の違いをもたらす移動の障壁であろう。地方都市のように公共交通の営業終了時間が著しく早く本数も乏しい都市と、深夜から未明まで頻繁に公共交通が行き交う大都市圏では、夜間の観光行動の際の制約の掛かり方が大きく異なる

る。逆にいえば、移動の制約にまつわる現象を通じた都市間格差の分析は、夜のツーリズムを体系化していく上での要諦である。そこで本研究は、夜のツーリズムにおいて、制約によってもたらされる到達可能性の地域的差異が大きな意味を持つことに鑑み、移動上の制約を軽減することによって対価を得ている代表的な夜の産業「運転代行業」に焦点を当てる。

運転代行業は、飲酒などの理由で運転ができなくなった酔客の自動車を代わりに運転して、目的地（依頼者宅）まで送るサービスを指す。そのルーツは1966年に創業した運転手の派遣サービス（碓井運転代行社：現 JDS インターナショナル）であるとされるが、2002年6月に施行された『自動車運転代行業の業務の適性化に関する法律』によってその資格要件が規定されたことにより、制度施行後11年で、業者数は4,148から8,778へ、登録台数は17,853台から29,561台へと、それぞれ大幅に増加した（警察庁交通局2008；警察白書2012）。

この増加の背景には、悪質な運転による交通事故の増加を受けて2001年12月25日に施行した危険運転致死傷罪（平成13年12月5日法律第138号）がある。同法が適用された場合、致傷に対して15年以下の懲役、致死に対して1年以上の有期懲役（最高20年、併合加重の場合は最高30年）となり、業務上過失致死傷罪（刑法第211条：5年以下の懲役・禁錮または50万円以下の罰金）に比べ大幅に罰則が強化された。これが運転代行業急伸の大きな追い風となった。しかし、運転代行業についての既往の研究は、ほとんどが上記法律の施行前後に集中し、新法の内容解説をしたものに限られる（高岩2002；大野2003）。その実態は事実上ブラックボックスであり、上記分野を除く人文・社会科学の中で、管見の限り運転代行業をとりあげた研究はほぼ存在しない。

3. 本研究の目的・方法

2011年10月、公益財団法人「運転代行振興機構」により、運転代行業者に対して、初めて全国規模の組織的な実態調査が行われた（配布7,580票、回収2,518票：回収率33.2%）。既往の研究がない中、同調査は極めて貴重なデータを提供しているが、その成果はほとんど知られておらず、同機構が制作した調査報告も、ほぼ単純集計値のみの公表にとどまっている。夜のツーリズムにおける（主に権威の制約としての）地域間格差を考える上で重要な役割を担っている運転代行業について、この希少なデータを専門的な見地から可能な限り分析し、知見を学術界に還元することは、運転代行業に対する学界の認知を高める上で極めて有意義であると考えた。

幸い、本研究の趣旨をご理解いただいた同機構から合算

前の県別集計データを提供いただくことができ、調査票とあわせてデータ構造を検討した結果、部分的には定量的な議論が可能であることが分かった。具体的には：(1)認定区分（法人か個人か）、(2)営業年数、(3)事業形態（自宅か事務所か）、(4)事業所あたり車両持込／社用車保有台数、(5)配車方法（携帯か無線か）、(6)始業時間と就業時間、(7)正社員構成比（%）、(8)事業所あたり従業員数、であり、うち名義尺度についてはダミー変数を適用して量的な分析の対象とした。本報告は全国的にデータ解析を行うにあたっての予備調査と位置づけ、元データが、地域的差異の指標として適用可能かを検証することが目的である。東京は最も人口規模が大きく、公共交通が発達し、未明まで運行されている都市であるのに対し、富山は2010年のDID人口比率が37.1%で、その値は東京（98.2%）のわずか38%程度に過ぎない。また富山は、世帯あたり自家用車保有台数も福井に次ぐ全国第2位（2011年）と際だって高く、自家用車による通勤や買物を前提とした郊外居住が進んでいる。そこで、本研究では東京（大都市）と富山（地方都市）を対象に、上記項目の回答をt検定によって分析した。標本数は東京18業者、富山43業者である。

4. 結果と考察

分析結果を表1に示す。(1)認定区分、(3)事業形態、(5)配車方法、(7)正社員構成比（%）、(8)事業所あたり従業員数の5項目で有意差が検出された。それぞれ東京の方が：

表1 事業者回答傾向のt検定結果（東京／富山の比較）

質問項目	群名	μ	ν	SD	t^*	p
認定区分 (法人0/個人1)	東京	0.33	0.24	0.49	4.547	0.000
	富山	0.84	0.13	0.37		
営業年数	東京	8.56	123.20	11.10	0.072	0.943
	富山	8.74	62.64	7.91		
事業形態 (自宅1/事務所0)	東京	0.28	0.21	0.46	2.027	0.047
	富山	0.56	0.25	0.50		
持込車両数/事業所	東京	0.67	1.52	1.23	1.130	0.273
	富山	0.28	0.61	0.78		
社有車数/事業所	東京	5.61	12.84	3.58	1.514	0.135
	富山	4.02	14.53	3.81		
配車方法 (無線1/携帯0)	東京	0.89	0.11	0.32	3.479	0.001
	富山	0.51	0.26	0.51		
始業時間	東京	19.03	1.20	1.09	0.510	0.612
	富山	18.70	13.46	3.67		
終業時間	東京	27.20	0.81	0.90	1.462	0.151
	富山	26.71	2.27	1.51		
正社員構成比	東京	18.22	351.86	18.76	1.707	0.047
	富山	29.06	859.97	29.33		
従業員数/事業所	東京	21.65	132.49	11.51	3.189	0.002
	富山	11.34	126.42	11.24		

(*一部にWelchの方法を適用)

(1)法人営業者の割合が有意に高く、(3)自宅を事業所にする割合が高く、(5)無線がより使用され、(7)アルバイトで中心で、(8)事業規模が有意に大きい。また東京の都市規模は遙かに大きいにもかかわらず、回答数は富山の半分以下であった。一方、営業年数はどちらも平均8年半、社有車を中心で、18~19時に始業、午前2~3時に終業する運営形態をとっていた。以上のように、東京の事業者の方が流動的で安価なアルバイトを労働力の主体とし、大規模かつ組織的に運営されていた。大都市の運転代行業は(他の交通モードが充実している分)相対的に経営環境は厳しい。その反面、労働力供給は潤沢なため、経営の大規模化と非正規雇用の拡大が進み、結果的に雇用調整弁の役割を果たしている可能性が示された。

5. おわりに

分析の結果、運転代行業の運営実態には一定の地域的差異が認められ、今後の追加検討の必要性を示すことができた。同調査は事業主が対象のため、運転代行業の果たしている社会的・経済的役割については、ステークホルダー全体の詳細な実態調査を進めることによって、明らかにしていく必要がある。本稿に続く研究が現れることを期待したい。事務局長の山城朗様を始め、全面的なご助力を頂いた公益財団法人運転代行振興機構の皆様に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 石原昭一 1987. ホワイトイルミネーション・サッポロプラザー光は北から一夜间照明と観光. 新都市 41(5): 60-66.
- 大野 敬 2003. 運転代行業法の施行1年後の状況について. 人と車 39(10): 9-11.
- 岡本耕平 2003. 行動地理学の潮流. 高橋伸夫編『21世紀の人文地理学展望』古今書院: 460-472.
- 小川功 2009. 牡丹の植栽・夜間点灯による"観光まちづくり". 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 8: 1-18.
- 高岩直樹 2002. 自動車運転代行業の業務の適正化に関する法律施行令の概要について. 月刊交通 33(4): 55-59.
- 杉山和明 1999. 社会空間としての夜の盛り場. 人文地理 51: 396-409.
- 谷原良寛 2008. 柴又帝釈天参道ライトアップの照明. 照明学会誌 92(7): 347.
- 丸々もとお 2012. 「日本夜景遺産」東京: 河出書房新社.
- Berkley, B.J. 1998. Application of FMEA to nightclub security. *Journal of Hospitality & Tourism Research* 21(3): 93-105.
- Bellis, M.A. Hughes, K. and Lowey, H. 2002. Healthy nightclubs and recreational substance use from a harm minimization to a healthy settings approach. *Addictive Behaviors* 27: 1025-1035.
- Bishop, R. and Robinson, L.S. 1999. In the night market. *Women's Studies Quarterly* 27(1/2): 32-46.
- Calafat, A. et al. 2013. Nightlife, verbal and physical violence among young European holidaymakers. *Public Health* doi:10.1016/j.puhe.2013.05.010.
- Calafat, A. et al. 2010. *Tourism, nightlife and violence*. Palma de Mallorca: IREFREA.
- Chang, J. and Hsieh, A-Tien. 2006. Leisure motives of eating out in night markets. *Journal of Business Research* 59: 1276-1278.
- Davidson, J.O. Sex tourism in Cuba. *Race & Class* 38(1): 39-48.
- Del Casino Jr., V. and Hanna, S. 2000. Representations and identities in tourism map spaces. *Progress in Human Geography* 24(1): 23-46.
- Freese, T.E., Miotto, K. and Reback, C.J. 2002. The effects and consequences of selected club drugs. *Journal of Substance Abuse Treatment* 23(2):151-156.
- Goldenberg, S.M. et al. 2011. How important are venue-based HIV risks among male clients of female sex workers? *Health &Place* 17: 748-756.
- Hesse, M. and Tutenges, S. 2011. Young tourists visiting strip clubs and paying for sex. *Tourism Management* 32: 869-874.
- Hobbs, J.D., Pattalung, P.N. and Chandler, R.C. 2011. Advertising Phuket's nightlife on the internet. *Journal of Social Issues in Southeast Asia* 26(1): 80-104.
- Hsieh, A-Tien and Chang, J. 2006. Shopping and tourist night markets in Taiwan. *Tourism Management* 27: 138-145.
- Kurtz, S.P., Inciardi, J.A. and Pujals, E. 2009. Criminal activity among young adults in the club scene. *Law Enforcement Executive Forum* 9(2): 47-59.
- Lee, S-H, Chang, S-C, Hou, J-S., and Lin, C-H. 2008. Night market experience and image of temporary residents and foreign visitors. *International Journal of Culture, Tourism and Hospitality Research* 3: 217-233.
- Measham, F., Aldridge, J. and Parker, H. 2001. *Dancing on drugs*. London: Free Association Books.
- Sönmez, S., Apostolopoulos, Y., Theocharous, A, and Massengale, K. 2013. Bar crawls, foam parties, and clubbing networks. *Tourism Management Perspectives* 8: 49-59.
- Thrift, N. 1977. *An introduction to time-geography*. CATMOG 13: Study Group in Quantitative Methods, Institute of British Geographers.
- Tutenges, S. 2012. Nightlife tourism. *Tourist Studies* 12: 131-150.
- Wahl, S., Kriston, L. and Berner, M. 2010. Drinking before going out. *International Journal of Drug Policy* 21: 251-254.